この風を止めようと思うな、おのれが風になれ

千年の時を超えて、
無限の愛、情熱、探求、冒険。
万民の胸を熱い感動でひたして、
いま甦る人間〝空海〟の大いなる旅。
表紙曼荼羅・伝真言院曼荼羅・毘盧遮那如来（大日如来）東寺蔵

人はなぜ生きるのだ…

かいせつ

弘法大師空海――その名を偉大な宗教家として私たちは知っています。

彼の偉業は真言密教のみにとどまらず、灌漑工事、綜芸種智院の創立、人間の生活に関する問題など文化の全般にまで及んでいます。

その人間追求の姿勢は、機械文明の唯中に生きている私たちに、人間の原点を深く考えさせ、大いなる共感を呼び起こすに違いありません。

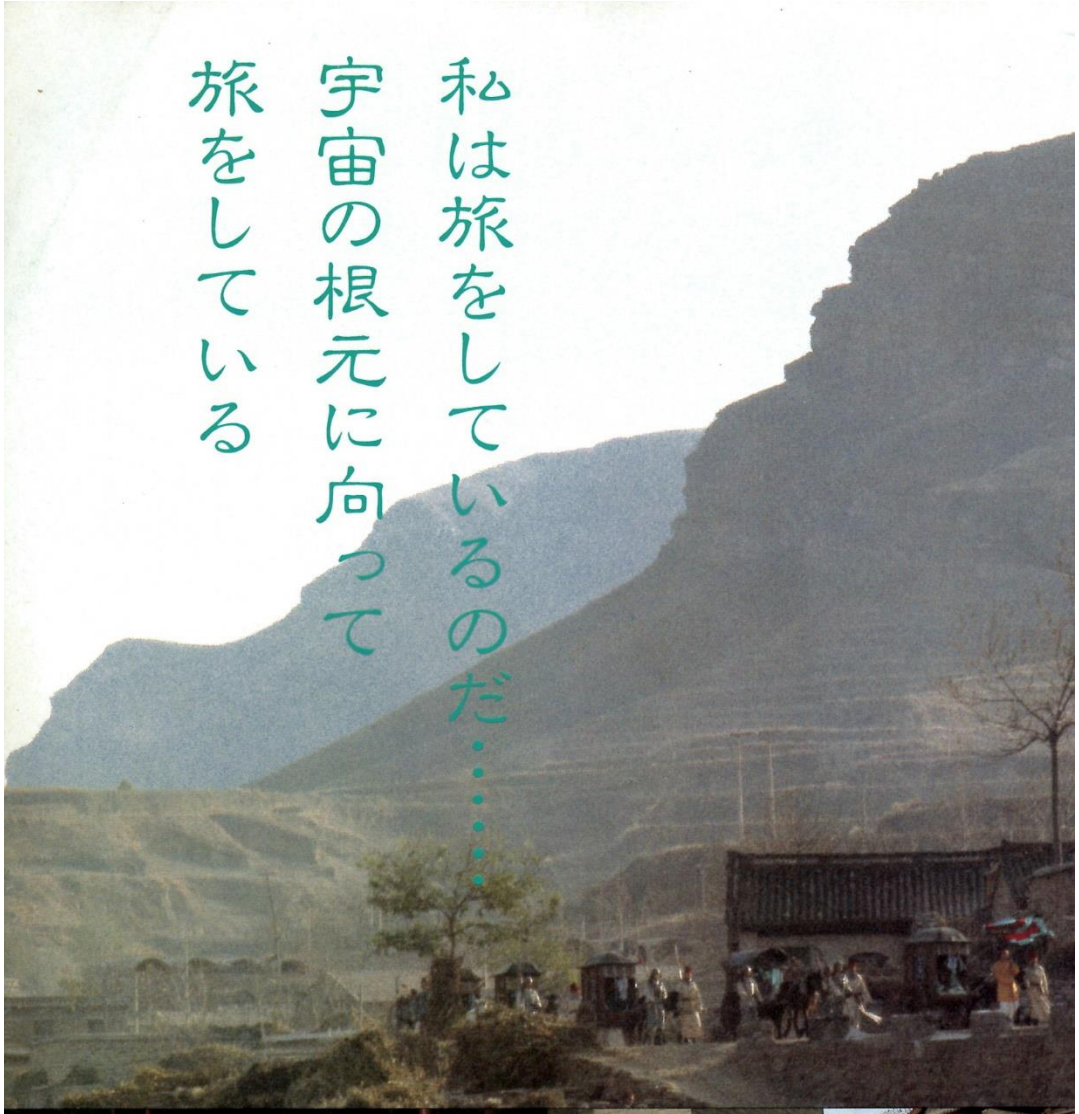
しかし、空海があまりにも多方面に渡って活躍し、偉大であっただけにその実像は親しまれているわりに知られていません。全真言宗青年連盟と東映が提携して製作する映画「空海」は、彼が一人の人間としていかに完全なる人間をめざして懸命に生きたか、その生いたちから入定までの六十一年の波乱の生涯をドラマチックに、かつまた完全に描ききるものです。

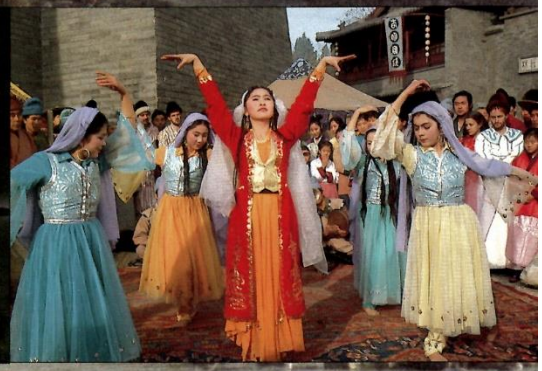
宝亀五年（七七四）、四国に生まれた空海は十八才で都の大学に入るが、地方豪族の子弟が中央官界入りした悲哀を洞察して身を山林に投じ、過酷な修業を経て仏教への眼を開く。決死の覚悟で渡唐、密教の全てを伝授されて再び死を賭して帰国、やがて日本に壮大な思想と文化を広めるというのが全篇の荒筋です。

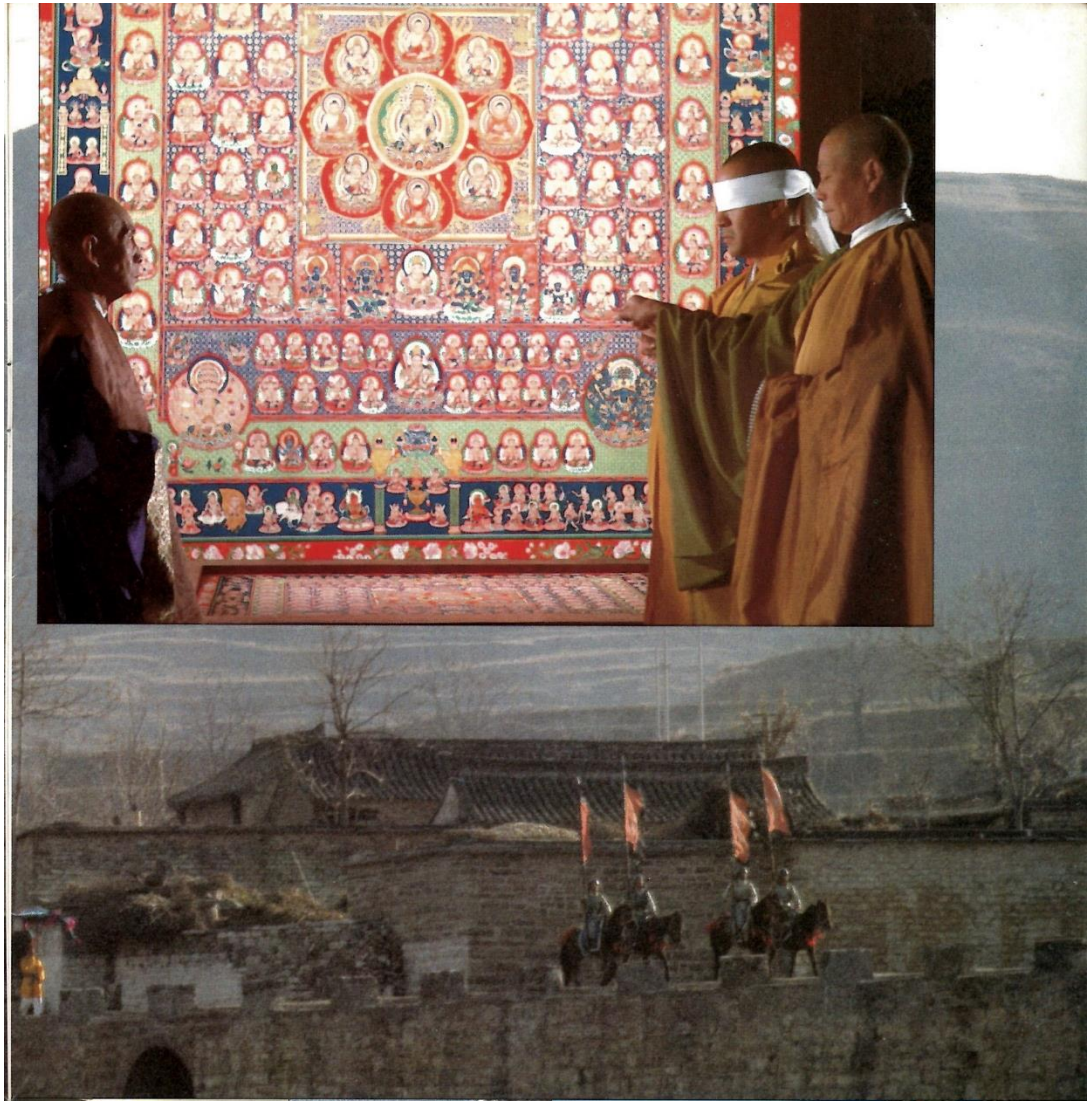
脚本は、空海にまつわる膨大な資料をもとに、一年半を費して早坂暁が執筆。監督には佐藤純彌があたり、空海の烈々たる生きざまを映像に定着。主人公の空海に扮する北大路欣也も新たな境地を開く役柄に挑戦しています。

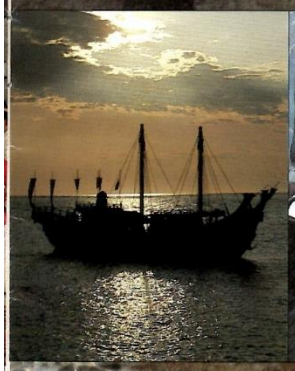
一九八四年は、弘法大師空海が入定して、一一五〇年の御遠忌にあたる年。この作品には、現在の日本映画界では破格の総製作費十二億円という巨費が投ぜられ、空海が密教を授けられた地である中国大陸にも一大ロケーションを敢行。また、当時のままの遣唐使船を建造―撮影に使用しています。この映画「空海」は、単なる伝記映画ではなく、スケール大きな歴史ドラマであり、また全国民必見の感動の人間ドラマです。

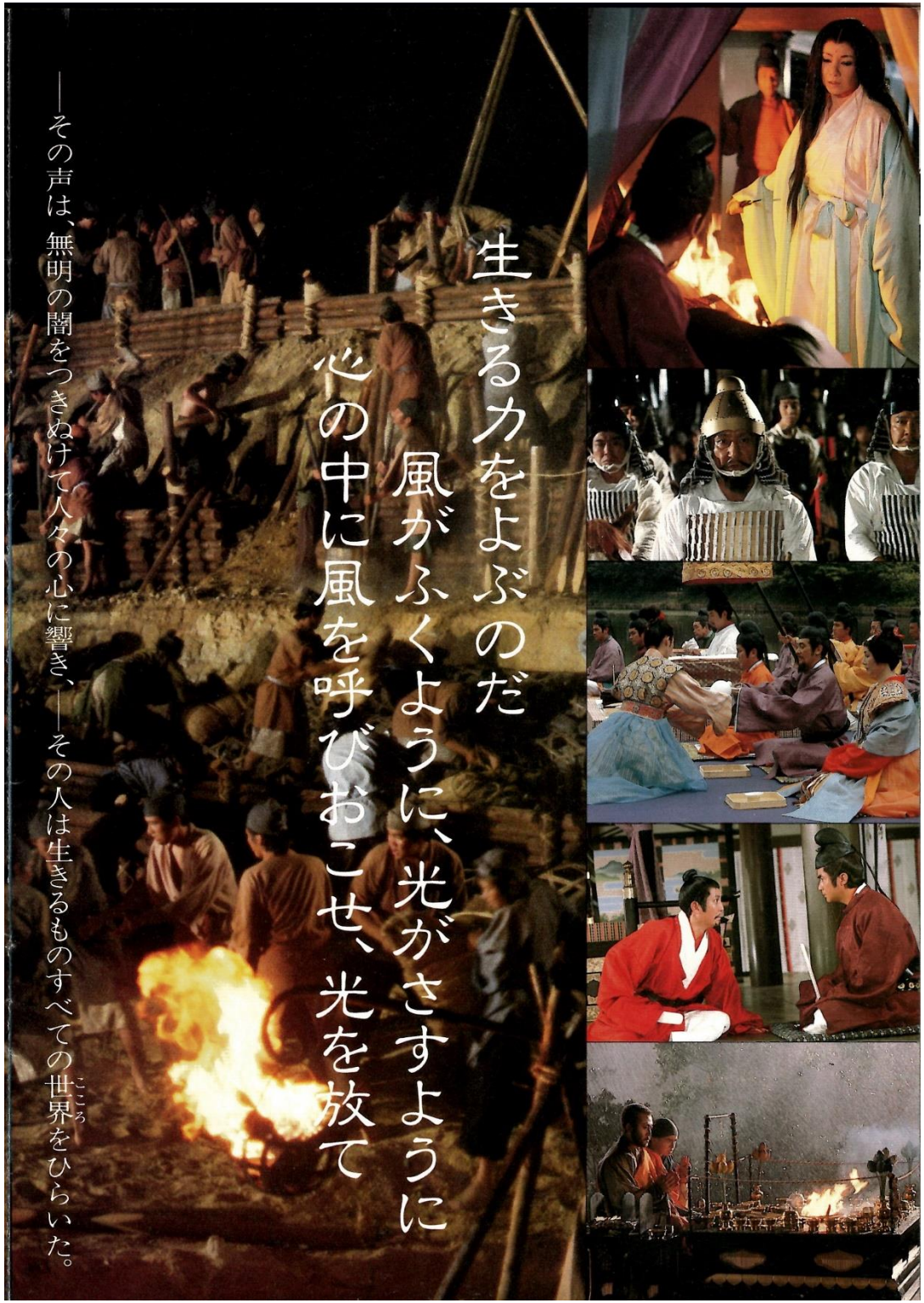
私は旅をしているのだ……
宇宙の根元に向って
旅をしている











生きる力をよぶのだ
風がふくように、光がさすように
心の中に風を呼びおこせ、光を放て

——その声は、無明の闇をつきぬけて人々の心に響き、——その人は生きるものすべての世界（こころ）をひらいた。

生れ生れ生れ生れて
生の始めに暗く

死に死に死に死んで
死の終りに冥(くら)し